慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	海外派遣駐在員の配偶者のキャリア形成行動とキャリア発達に関する調査研究
Sub Title	
Author	石川, 孝子(Ishikawa, Takako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.55- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000054-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特に現代の歩き遍路に関して，"宿"が移動と定住の重要な結節点になっていることがわかった。そこで次年度以降の新たに宿に関する調査を企画するべく，その予備調査や理論的枠組みの整理等も平行して行った。具体的には，2002年1月に実施した21番，22番両札所近辺の遍路宿業者に対する聞き取り調査などである。なお，この問題は，筆者がリサーチアシスタントとして参加している（2002年4月より客員研究員）早稲田大学道空間研究所の遍路宿と宿泊施設に関するプロジェクトでの成果と合わせて論文にする予定である。

また，地域社会の「遍路」と「乞食遍路」を分類する認識論に関する調査についても，新たなデータを得ることができた。こちらは，2002年9月の日本宗教学会（大正大学），10月の日本民俗学会（筑波大学）で研究発表を行う予定である。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

注

1 「四国八十八カ所」ともいう。四国四県にまたがる大規模な巡礼で，年間10万人余の参加者があるといわれている。
2 主に功徳を授かる為に，巡礼者に財，サービスを施す行為を接待という。
3 『日本民俗学』第226号（日本民俗学会）2001年5月
4 『哲学』第107集（三田哲学会）2002年1月
5 なお，本稿は論文執筆前に，日本民俗学会第53回年会（2001年10月）において研究発表を行った。

海外派遣駐在員の配偶者のキャリア形成行動とキャリア発達に関する調査研究

石　川　孝　子*

標記研究は，年度当初，国内外の先行研究の徹底的なレビューから始めるつもりであったが，博士課程1年目ということもあり，厳密にレビューするためには，本研究テーマに直接に関係する国際経営学・社会心理学などの基礎理論の習得が前提との認識に至り，その方向での学習を進めた。一方で，既に実施していた調査研究の結果を論文としてまとめ，学術雑誌へ投稿を完了した。

[平成13年度の実績]

「デュアル・キャリア夫婦に関する探索的研究—夫の海外転勤に伴なう妻のキャリア継続・中断・転換に着目して—」（共著）『国際ビジネス研究学会年報2001年版』が本年度における研究成果である。概要は以下の通りである。

本調査研究は，夫の海外転勤・海外留学に同伴した経験を有し，現在は東京周辺で就業する30代後半から40歳位までのキャリア中期にある既婚女性10名にインタビューを実施し，大学・短大卒業時から現在に至るまでのキャリア形成の様相を，夫の海外転勤への対処パターン，就業の継続・中断・転換，またキャリア形成の外部環境としての組織や職務の特性などの観点から分析し，現時点におけるキャリア発達，価値観・職業意識などについて吟味した。

その結果，夫の海外転勤の時点で，総合職に就く者や，職務概念が明確で外部労働市場との隔たりが少ない職場すなわち外国型の組織で働く者たちの中には，夫の勤務地への転勤や現地法人への異動を妻側の雇用主が措置したり，夫の赴任地からテレワークが可能な措置をするケースも出てきていることがわかった。一方，夫の海外転勤前に不明確な職務概念や行き止まりの職種に就いていた者は，夫の海外赴任地に同伴し，次のキャリア・アップの為の学位・資格の取得の後，専門性をいかして外国型職務編成・組織特性の組織で働くケースがほとんどであった。

また，対象者のキャリア発達段階という側面から見ると，キャリア発達が順調に進んでいる者に共通して見られる特徴は，自らの深い洞察力や高い学習能力と同時に将来のキャリアの明確な方向性や展望を表明していることである。一方，出産や海外転勤をきっかけにキャリア探索期に長くとどまるケースでは，キャリア初期において行き止まり職でチャレンジする機会に恵まれなかったり，組織形態への不適合を起こしたこと，自らの強みやドメインの把握が出来なかったことなどが原因となって

いるようだ。

デュアル・キャリア夫婦の価値観や行動様式などについて，「プロテウス型夫婦」モデル (Hall, 1978) との接点で，比較対照を行なった。その結果，夫婦のお互いの職業における成長や満足に価値観をおき，変わり身が早いといったプロテウス型夫婦に類似した志向性は見られるものの，現実の家庭生活においては夫の多忙もあり家事・育児などのマネジメントの責任は妻側が一身に背負っているか，少なくとも夫よりも責任を持つ割合が高い，という傾向が確認された。

[研究の一般的動向]

過去 10 年間ほどにさかのぼって，国内における関連研究のレビューを行った。ここでは，本調査研究への示唆が少なからずあった 3 つの先行研究について言及する。

江川 (2001) は，保健社会学の分野において，①日本人駐在員のソーシャルストレスの継時変化を把握，②「海外駐在受け入れにあたって『帰国後の処遇・昇進』で悩んだ人の現地でのソーシャルストレスがそうでない人に比較して有意に高い」という作業仮説の検証，③諸外国からの駐在員との国際比較の 3 点を具体的目的として調査研究を実施している。調査対象はベルギーに駐在する日本・米国・欧州（英・独・蘭）からの派遣駐在員である。筆者の研究との接点は次の点にある：駐在受け入れにあたっての悩み（回答%）で「配偶者の仕事の中断」をあげた者の割合は，米国（2000 年）：30.4%，欧州（2000 年）：20.8%に対して，日本（1993 年）：3.6%→日本（2000 年）：7.6%と，欧米に比較して日本が依然として低いものの増加傾向にある。

佐藤 (2000, 2001a, 2001b) は，海外駐在員妻の異文化適応に焦点をあて，社会学的視点と臨床的視点の二つに分けて先行研究レビューした結果から，「海外駐在員妻の異文化適応と『語学力』，『滞在国コミュニティとの接触』との相互関係について再検討する」というリサーチ・クェスチョンに基づき，海外生活体験者グループのメンバー 20 名（すべて元・海外駐在員妻）を対象に質問紙と面接で調査を行った結果を帰納的に分析し，異文化適応問題における「制度」「言語」「日本への帰属意識」「人間関係」「文化」という要因の相関性について考察している。調査対象者 20 名のうち 1 名を除き全員が赴任前にも専業主婦であったことから，本調査研究は「伝統的家族」（いわゆる稼得責任は夫にあり，家事責任は妻にある）を前提にしているのであろうことから，著者の調査研究とは直接の接点は無いけれども，博士課程研究のひとつの進め方としては多くの示唆を得た。

伊佐 (2000) は，オクラホマ大学に提出した博士論文の翻訳・加筆修正を行い本書を上梓した。アメリカから帰国した企業駐在員の妻たちの帰国異文化ショック（逆カルチャーショック）とその後の再適応問題を，異文化コミュニケーション・社会学（家族学・性差研究）・女性学の理論を統合的に用いて扱った実証的研究である。この研究も，「伝統的家族」を前提としているため，筆者の興味関心とは直接的には重ならないものの，博士論文の全体構成の立て方などについては大変参考になった。

[引用文献]

江川　緑，「海外派遣駐在員のソーシャルストレスとその関連要因に関する研究　―ベルギー・ブリュッセル地域をフィールドとして―」，2001

Hall, Francine S. and Hall, Douglas T., *The Two-Career Couple*, Addison-Wesley Publishing Company, Inc., 1979.（三崎滋子訳，『キャリア・カップル』，クィック・フォックス社，1980）

伊佐雅子，『女性の帰国適応問題の研究　―異文化受容と帰国適応問題の実証的研究―』，多賀出版，2000

石川孝子，小豆川裕子，「デュアル・キャリア夫婦に関する探索的研究　―夫の海外転勤に伴う妻のキャリア継続・中断・転換に着目して―」，『国際ビジネス研究学会年報 2001 年』，2001

佐藤良子，「海外駐在員妻の異文化適応に関する一考察　―(財)豊田市国際交流協会ボランティアグループ『海外生活体験者グループ』の事例から―」，『愛知淑徳大学異文化コミュニケーション研究』3, 2000

佐藤良子，「異文化適応の概念定義　―海外駐在員妻にとって異文化とは？―」，『愛知淑徳大学異文化コミュニケーション研究』4, 2001a

佐藤良子，「欧米を中心とした海外駐在員妻の社会的支援ネットワーク　―妻の異文化適応を支援するために―」，『日本コミュニケーション学会』29, 2001b

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程